

第1章 西予市の概要

1. 西予市の自然的・地理的環境

■ (1) 西予市の位置と面積

愛媛県西予市は、四国西部に位置し、なんよ南予地域（伊予の南の意）に属します。南予地域は中予地域や防予諸島、東九州、幡多・土佐などに囲まれた位置にあります。

西予市は、佐田岬半島南の宇和海沿岸のリアス海岸地帯から四国カルストに至る東西距離約49km、南北距離約24kmと東西に長く、その面積は514.34km²と県内第2位の広さを有し、県全体の9.06%を占めます。

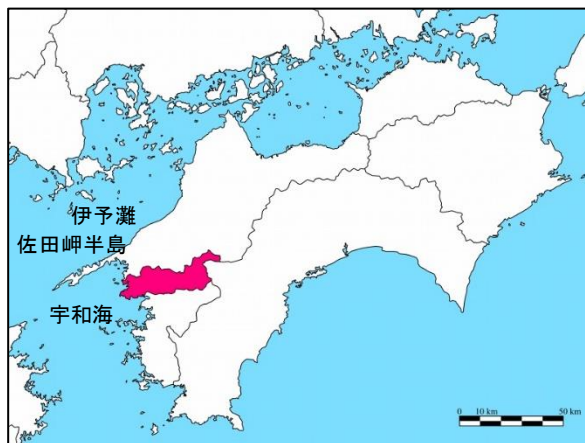


図5 西予市の位置

北に大洲市、北西に八幡浜市、南に宇和島市、南東に鬼北町、北東に久万高原町、内子町、東に高知県梶原町と境を接します。地域の東端は野村町大野ヶ原、西端は明浜町大崎鼻、北端は野村町小松、南端は明浜町宮之串となります。



図6 西予市の範囲と地形（縮尺不同、地理院地図色別標高図に加筆）

■ (2) 西予市の地質と地形

ユーラシアプレートの下へフィリピン海プレートが沈み込む動きによって、陸地側に堆積物が付け加わることが知られています（付加体）。四国の大部分を占めるのは、この付加体で、プレートが沈み込む時に大地を押し、四国山地は今も隆起し続けています。西予市では主に秩父帯が広がっており、秩父帯には九州から四国、紀伊半島、関東に至る黒瀬川帯が存在します。市域北部には御荷鉢構造帯¹が、南縁には仏像構造線²を境に四万十帯が分布します。黒瀬川構造帯では、国内でもきわめて古い4億5,000万年前の岩石が見られ、城川町（旧黒瀬川村）を流れる黒瀬川がその模式地となっています。

秩父帯では、後述するように宇和海沿岸部の明浜町高山地区を中心に、江戸後期から石灰焼きが盛んになり、戦後まで石灰産業で栄えました。ドロマイト採掘は大正期以降に宇和、黒瀬川（現城川町）などで行われ、昭和31年（1956）開業の大日本ドロマイト鉱山（城川町田穂）は現在も稼働する現役の鉱山です。御荷鉢構造帯付近では、野村町溪筋地区で自給自足的な石灰焼きが行われていたことが知られています。また、宇和盆地ではチャートが優勢で、古墳の葺石や石室、水田、水路、住宅や寺社などを支える石垣に利用されています。四国は国内有数のマンガン鉱床分布地で、野村・大平（宇和）・四道（宇和）・蔵貫（三瓶）などの鉱山を主とした愛媛県の生産量は全国の優位にあつたといえます。

平成25年（2013）、黒瀬川構造帯の模式地を有し海拔0mから標高1,400mまでの自然と歴史、多様な生態系に恵まれた四国西予ジオパークが、日本ジオパークに認定されました。

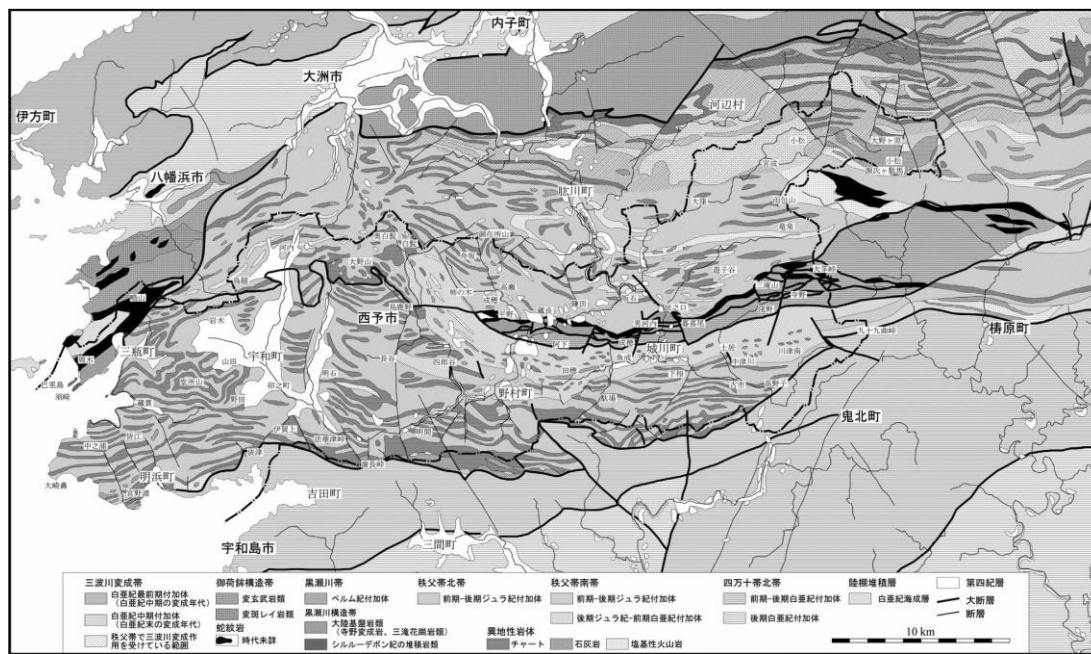


図7 西予市周辺の地質図（小出2012より³）

1 構造帯：構造線上あるいは構造線内に特徴的に存在する地質体。
 2 構造線：断層群による境界線。
 3 小出良幸2012「愛媛県西予市付近の地質の概要と課題」『札幌学院大学人文学会紀要』91、札幌学院大

第1章 西予市の概要

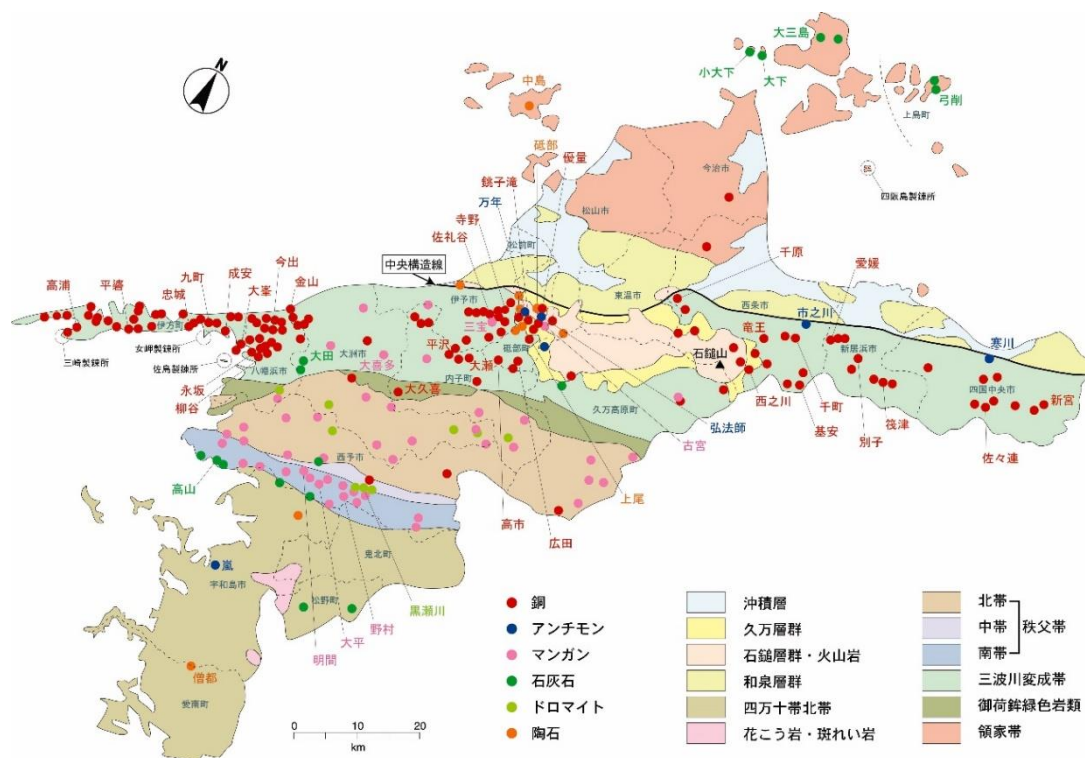


図8 愛媛県の鉱床図 ((公財) えひめ地域政策研究センター編 2013 より⁴⁾)

主要な山岳は、西予市の東境にある^{あまつみやま}雨包山(標高1,111.6m)を筆頭に、鬼北町との境の御在所山(標高915.5m)、宇和の大野山(標高802.0m)などがあるほか、大野ヶ原の源氏ヶ駄場の1,402.9mが市域の最高点です。市域は山がちで、独立性の高い狭小な平地や緩斜面に集落が分散しています。林野面積は385.48km²と市域の75%を占めます。

その中であって標高約200mの宇和盆地は、南予随一の広さを誇る平地をもち、弥生時代以来稲作が盛んな土地として知られます。宇和盆地の東にある野村盆地や城川盆地では河成段丘が発達し、平地の少ない山間部にあって段丘面が貴重な農業用地や居住地として利用されています。また、四国カルスト西部に位置する大野ヶ原は、壮絶な開拓の歴史を経て県内有数の酪農地帯に成長しました。リアス海岸が特徴的な宇和海沿岸部では、湾奥の沖積地に集落が営まれ、穏やかな湾の特性を活かした養殖業や斜面地での柑橘栽培が盛んです。

河川では、肱川がその源流を西予市宇和町の鳥坂峠^{とさか}に発し、宇和盆地を南流して東へ向きを変え、野村盆地では北流して、舟戸川、黒瀬川と合流。蛇行して鹿野川湖へ注ぎ、途中小田川など多くの支川と合流しながら大洲盆地を貫流し伊予灘に注いでいます。肱川の長さは103km、流域面積は1,210km²、支川数474河川と、流域面積に対して支川数が多い点が特徴です。かつて肱川では、舟運を利用した物資の運搬が盛んに行われていました。

学

⁴⁾ (公財) えひめ地域政策研究センター編 2013 『愛媛県の近代化遺産』愛媛県教育委員会

■ (3) 気 候

『愛媛県史 地誌Ⅰ』によると、西予市域には、以下の5つの気候区分があてはまるという複雑な様相を呈します。

Ic 石鎚山地、大野ヶ原、法皇山脈気候区：県下で最も寒冷で最寒月気温は氷点下2℃から7℃、最暖月で15℃から20℃で冷帯気候。降水量は四季を通じて多く、年降水量は3,000mmを超す。

IIc 野村盆地気候区：北の大洲盆地の気候⁵に近い。大洲よりやや低温。秋に放射霧が多い。梅雨期・秋雨期とも大洲よりやや多雨。しかし冬の降雪は少ない。

II d 宇和盆地気候区：南予盆地の中で最も標高が高く、やや低温、寡照。降雪は多いが秋の霧は少ない。梅雨期の降水量多く、ラング雨量因子⁶は大きい。

III a 南予海岸北部気候区：海洋性気候はせまい海岸地帯に限られる。冬はやや低温で降雪も多いが、春の訪れは早い。梅雨期の降水は多く、秋雨期はやや少ない。

III c 岬半島気候区：最も海洋的気候で冬温暖・夏冷涼で、気温の日較差も小さい。冬に北西季節風が特に強い。また台風期にも強風が吹く。

このように多様な気候が見られることもあって、西予市では本州の気候をすべて見ることができるとも言われます。

一方で、宇和の昭和55年(1980)以降の平均気温を10年単位で見えていくと、1980年代の14.2℃から1990年代には15.0℃、2000年代には15.3℃、2010年代には15.2℃と上昇傾向にあります。気候変動に関する政府間パネル(IPCC)の報告書では、地球のさらなる温暖化と、これに伴い国内でも気温上昇や強い雨のさらなる増加などの気候変動が予測されています。平成30年7月5日0時から8日24時までの降水量539.5mmを観測し、甚大な被害をもたらした平成30年豪雨は記憶に新しいところです。また、平成23年(2011)の東日本大震災以降、西予市でも平成26年(2014)に震度5強、平成27年(2015)に震度5弱などの地震が発生しており、さらに100~150年間隔で繰り返し発生している南海トラフ地震が、近い将来高い確率で発生することが予測されています。

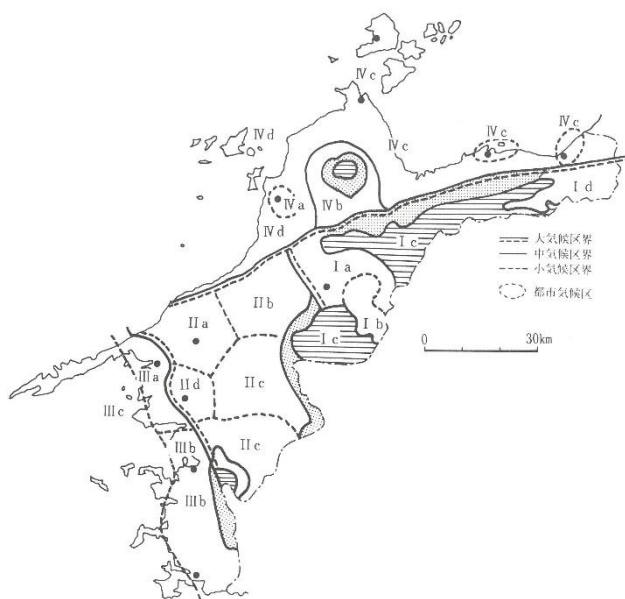


図9 愛媛県の気候区分 (注5文献より)

⁵ 大洲盆地の気候は、「夏高温、冬低温で盆地気候特性を示す。冬はかなりの降雪、秋から初冬に放射霧が発生し、寡照となる。」(愛媛県史編さん委員会編1983『愛媛県史 地誌Ⅰ(総論)』愛媛県)

⁶ 年降水量(mm)/年平均気温(C)で算出。宇和盆地は131で南予の盆地では最も大きい。

■ (4) 植 生

西予市の植生は、宇和盆地から野村・城川の大部分をスギ・ヒノキの植林が占め、植林の間にアカマツ群落やシイ・カシ二次林が散見されます。シイ・カシ二次林は、宇和盆地に少なく、明浜・三瓶・野村・城川に見られます。盆地の低地や河川沿いは水田・雑草群落で、主に水田として利用されていることがわかります。海岸部では柑橘栽培が盛んで、常緑果樹園が広く分布するほか、トベラ・ウバメガシ群集が見られます。大野ヶ原ではブナの原生林に代表されるシラキ・ブナ群集、酪農地帯を支える牧草地、茅場としても知られるススキ群団などが広がります。

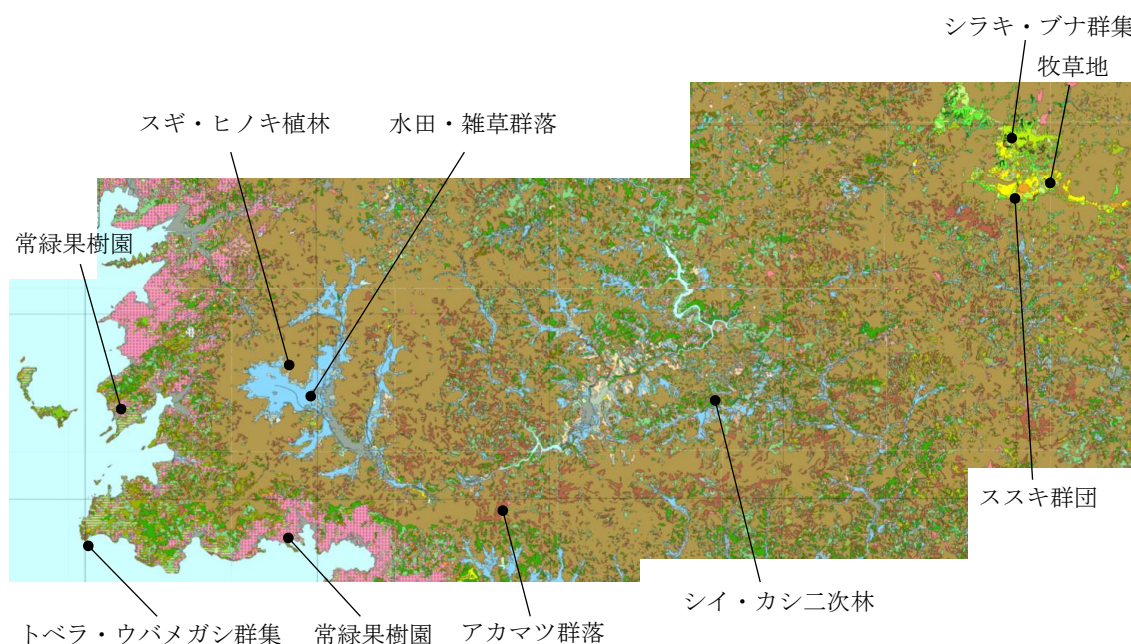


図10 西予市の植生（環境省生物多様性センター植生図に加筆）

2. 西予市の社会的状況

■ (1) 西予市の沿革

7世紀後半、宇和盆地には宇和評⁷が置かれたと考えられ、その後も宇和盆地が南予一円に設置された古代宇和郡の中核をなしました。中世、西園寺氏によって統治されていた宇和盆地は、天正12年（1584）土佐長宗我部氏の手落ち、翌年の秀吉の四国平定により小早川隆景の支配下となります。その後、戸田勝隆、藤堂高虎、富田信高を経て、慶長19年（1614）伊達秀宗が宇和島藩10万石を与えられました。明暦3年（1657）、秀宗の五男宗純が、3万

⁷ 7世紀後半に施行された行政区画の単位。「こおり」と読む。大宝元年（701）からは郡（こおり）に改められた。

第1章 西予市の概要

石を分知され吉田藩を立藩し、以降、西予市域は宇和島、吉田の両藩に属することとなりました。

明治4年(1871)7月の廃藩置県により伊予八藩はそのまま県となり、11月に大洲、新谷、吉田、宇和島の各県が合併して宇和島県となりました。明治5年(1872)宇和島県は神山県となり、翌明治6年(1873)石鉄県、神山県が合併し、愛媛県が誕生しました。

明治21年(1888)、市制・町村制が公布され、現在の西予市域では明治22年12月の狩江村設置を皮切りに、現在のいわゆる大字に該当する旧宇和町・旧村が設置されています。大正10年(1921)には旧三瓶町、翌年には旧野村町が設置されました。昭和29年(1954)宇和町と黒瀬川村、翌昭和30年(1955)三瓶町、野村町、昭和33年(1958)に明浜町が設置されました。昭和34年、黒瀬川村が城川町に改称。平成16年(2004)4月1日、東宇和郡明浜町、宇和町、野村町、城川町と西宇和郡三瓶町の5町が合併して、西予市が誕生しました。

表5 市域の移り変わり(『令和元年度西予市統計書』より引用)

年月日	市域の移り変わり
明治 22.12.14	市制町村制施行により狩江村を設置。
明治 23.4.1	市制町村制施行により俵津村、高山村を設置。
明治 23.4.1	市制町村制施行により多田村、中川村、笠置村、山田村、上宇和村、宇和町、下宇和村、田之筋村を設置。
明治 23.4.1	市制町村制施行により溪筋村、野村、中筋村、貝吹村、横林村、惣川村を設置。
明治 23.4.1	市制町村制施行により遊子川村、土居村、高川村、魚成村を設置。
明治 23.4.1	市制町村制施行により三瓶村、三島村、二木生村を設置。
大正 10.9.3	西宇和郡三瓶村を三瓶町とする。(3,818人=大正9.10.1人口:以下同じ)
大正 11.1.1	東宇和郡野村を野村町とする(5,242人)。
大正 11.2.11	東宇和郡上宇和村(1,999人)を廃し、その区域を同郡宇和町(4,147人)に編入。(計6,146人)
昭和 4.12.1	東宇和郡笠置村(1,565人=大正14.10.1人口:以下同じ)及び山田村(1,387人)を廃し、その区域をもって石城村(計2,952人)を設置。
昭和 18.4.1	上浮穴郡浮穴村(2,684人=昭和15.10.1人口:以下同じ)を廃し、その一部(1,862人)を喜多郡河辺村に編入し、残部(822人)を東宇和郡惣川村に編入。
昭和 29.3.31	東宇和郡多田村、中川村、石城村、宇和町、田之筋村、下宇和村を廃し、その区域をもって宇和町を設置。
昭和 29.3.31	東宇和郡遊子川村、土居村、高川村、魚成村を廃し、その区域をもって黒

第1章 西予市の概要

	瀬川村を設置。
昭和 30.1.1	西宇和郡三瓶町、三島村、二木生村、双岩村（大字和泉、布喜川、丙1番地から501番地まで、己1番地から300番地の第4まで）を廃し、その区域をもって新たに三瓶町を設置。
昭和 30.2.11	東宇和郡野村町、溪筋村、中筋村、惣川村、貝吹村、横林村を廃し、野村町、溪筋村、中筋村、惣川村の区域、貝吹村の区域のうち大字中 ^{なかと} 通 ^{おがわ} 川、鎌田、栗木、西1号、2号及び4号のうち1番地から470番地までの区域及び横林村の区域のうち大字坂石、予子林5番耕地から9番耕地まで、戊、巳、庚、辛及び壬の区域をもって野村町を設置。
昭和 30.3.21	東宇和郡俵津村及び狩江村を廃し、その区域をもって豊海村を設置。
昭和 33.1.1	東宇和郡豊海村及び高山村を廃し、その区域をもって明浜町を設置。
昭和 33.8.1	大洲市正信及び久保のうち鳥坂の区域を東宇和郡宇和町に編入。
昭和 34.4.1	東宇和郡黒瀬川村を城川村に名称変更し、城川町とする。
平成 16.4.1	東宇和郡明浜町、宇和町、野村町、城川町、西宇和郡三瓶町を廃し、その区域をもって西予市を設置。

■ (2) 西予市の人口

西予市の人口は、昭和25年（1950）の87,940人がピークで、高度経済成長期以降減少を続けています。平成の合併後では、平成17年（2005）の44,948人から現在は35,388人（令和2年（2020））と、この15年で実に9,560人、率にして2割以上の減少となっています。地区別で見ると、市役所本庁舎のある宇和で8.6%の減ですが、野村、城川、三瓶の3地区が軒並み3割近く減少しており、明浜では32.1%の減となっています。年齢別に見た構成は、0歳から14歳までの年少人口が3,491人（9.7%）、15歳から64歳までの生産年齢人口が16,695人（46.5%）、65歳以上の老年人口が15,690人（43.7%）で（令和3年12月、住民基本台帳より）、この10年間で老年人口はほとんど変わっていませんが、年少人口が27.1%減、生産年齢人口が27.3%減となっており、人口減少と少子高齢化が顕著に表れています。

人口動態では、出生数を死亡者数が上回る自然減の状況が続いています。また、転入・転出数を見ると、転入総数がやや増加傾向にありますが、転出総数に大きな減少は見られず、転出が転入を上回る社会減の状態が続いています（巻末資料2参照）。

国立社会保障・人口問題研究所によると、平成27年（2015）から令和27年（2045）までの30年間に、愛媛県南予地域全体の人口はほぼ半減、西予市では46%近く減少し21,080人になると予測されています（表6）。

第1章 西予市の概要

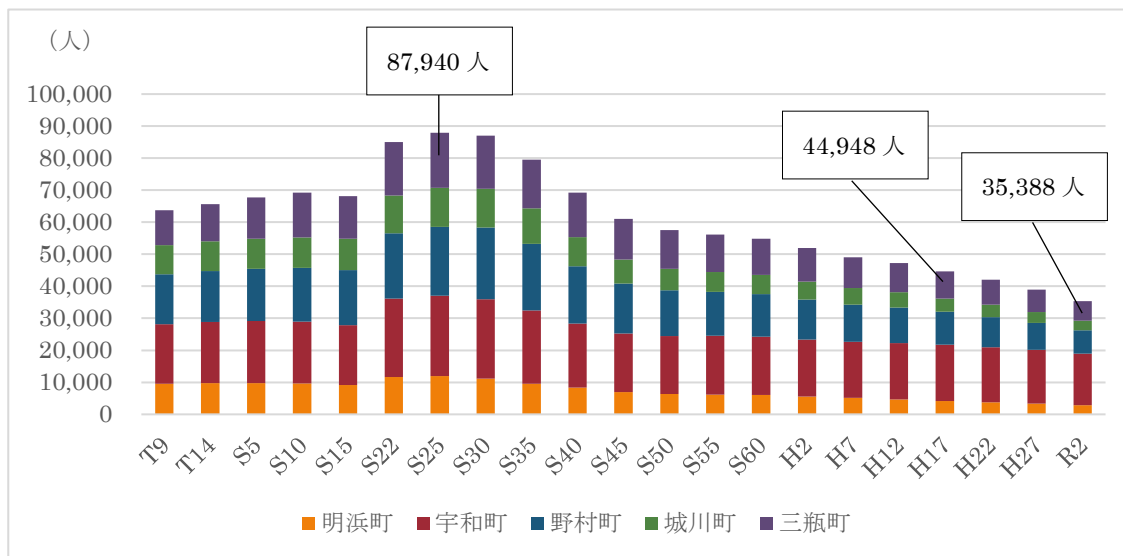


図11 西予市の人口の推移 (国勢調査データをもとに作成)

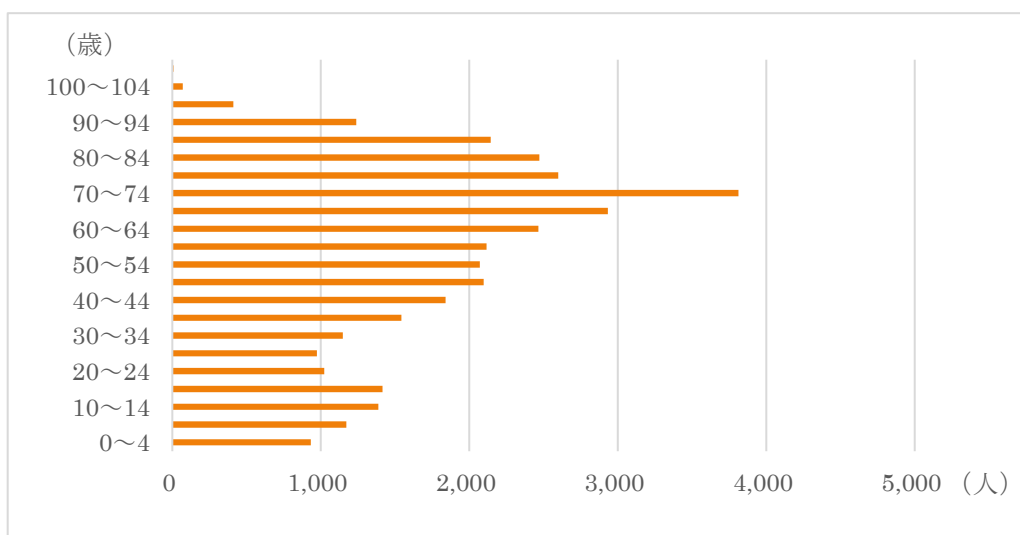


図12 年齢の構成 (2020年。住民基本台帳データをもとに作成)

表6 南予各市の将来推計人口 (単位: 人)

(『日本の地域別将来推計人口 (平成30年 (2018) 推計)』をもとに作成)

	2015年	2025年	2035年	2045年	2015 →2045
西予市	38,919	32,561	26,610	21,080	▲45.8%
大洲市	44,086	37,881	31,781	25,670	▲41.8%
八幡浜市	34,951	28,345	22,221	16,773	▲52.0%
宇和島市	77,465	63,860	51,044	39,216	▲49.4%
南予全体	258,468	213,669	171,802	132,844	▲48.6%

■ (3) 西予市の産業

① 産業別就業人口

西予市の15歳以上就業者数は16,740人で、産業別に見ると第1次産業が3,123人(18.7%)、第2次産業が2,766人(16.5%)、第3次産業が10,136人(60.5%)と、第3次産業の就業者数が多いことがわかります。第1次産業では農林業が2,867人(91.8%)と大半を占め、漁業は256名(8.2%)です。第2次産業では、建設業が1,199名(43.3%)、製造業が1,563人(56.5%)、第3次産業では、医療・福祉が2,976人(29.4%)と最も多く、次いで卸売業・小売業が1,991人(19.6%)、教育、学習支援業1,018人(10.0%)と続きます(以上、令和2年国勢調査より)。

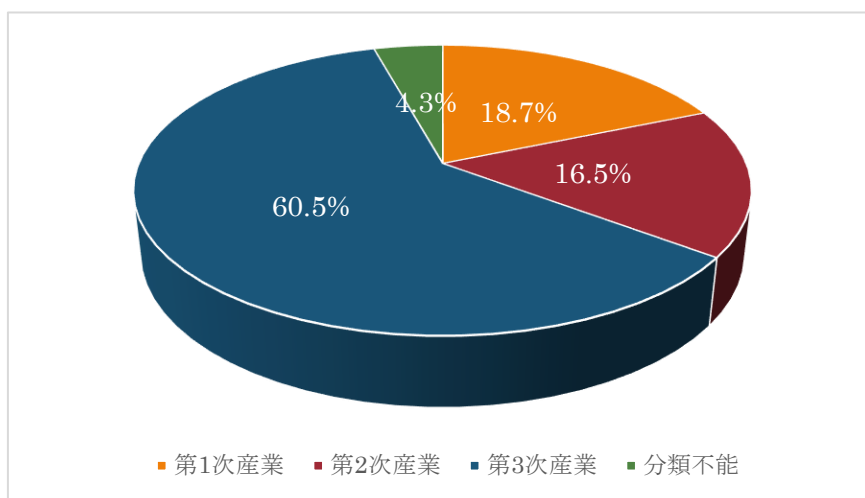


図13 産業別人口の割合 (令和2年国勢調査をもとに作成)

② 市内総生産

西予市の市内総生産額(平成26年度から30年度)は、およそ986億円から1,068億円で推移しています。内訳は、第3次産業が約75%で最も多く、次いで第2次産業が16.8%、第1次産業が7.7%となっています(5年間の平均値)(巻末資料2参照)。

過去5年で第3次産業は微増、第1次産業と第2次産業は増加傾向にあります。内訳を見ると、第1次産業では農業が最多で1.36倍に増加、水産業の総生産は約2倍に伸びています。第2次産業では製造業が最多で約1.5倍に、建設業は約1.35倍に増加しています。第3次産業では不動産業が最多ですが生産額は減少傾向にあり、保健衛生・社会事業、卸売・小売業、教育、公務と続きます。

③ 農 業

米

弥生時代前期前半に宇和盆地に稲作が伝播して以来、宇和盆地は南予随一の米の生産地であり、先史・古代・中世の長きにわたって宇和盆地が南予における優位性を保った要因の

一つであったと考えられます。慶長19年(1614)の『郡鑑(河野本)』物成帳によると、宇和組⁸(八幡浜市の一部を含む)の石高は23,747石で宇和島藩全体の23.3%を占め最多でした。元禄期の各組石高では、山田⁹・多田¹⁰両組で24,056石と藩全体の約24%を占めこれも最多。明治期の合併村の石高でも宇和町域で19,456石を誇りました¹¹。近世宇和島藩の内陸部では、ため池が盛んに造成され、耕地面積の拡大が図られました。例えば宇和盆地の一角をなす山田組では、田の面積が慶長期(1596~1615)から寛文期(1661~1673)までに1.57倍に増加しています。

排水不足の低湿地が多い宇和盆地では、膝まで浸かるような湿田も珍しくなく、湿田解消を最大の目的として、明治34年(1901)県下のトップをきって永長で耕地整理事業が実施され、その後も積極的に耕地整理が進められました。

現在の西予市は、県内の市町で第3位の米の産出額を誇っています。市内の田の面積173,758aのうち稲を作った田が142,206a、このうち宇和が88,416a(62.2%)、次いで野村31,276a(22.0%)、城川21,567a(15.2%)となっており、宇和盆地がその中心にあるといえます。

麦、甘藷、雑穀類

藩政期、宇和海沿岸部での稲作は、水が得られる川沿いの限られた範囲でのみ行われ、大半では麦や甘藷が栽培されました。甘藷は、戦後、切干しに加工され貴重な現金収入源となりました。山間部においては玉蜀黍(トウキビ)が主食となり、明治以降特に盛んになった焼畑で、麦や大豆、小豆、粟、稗、蕎麦、楮(カジ)などとともに栽培され、新たに三椏も導入されました。昭和以降は品種改良によって麦が多く収穫されるようになり、主食の地位が交代した地域もありました。戦時中は各地で食糧増産のため桑が引き抜かれ、麦や甘藷が栽培されました。焼畑は、戦後の三椏の価格低迷と木材需要の伸びにより、植林へと転換していきました。

現在、西予市の大豆は作付面積、産出額とも県内有数で、宇和盆地は県内でも数少ない小麦の生産地としても知られ、県下有数の穀倉地帯とされています。

野菜

樹園地を除く畑作では、市内の畑の面積52,219aのうち、野村が39,290a(75.2%)と大半を占めます。野菜では、野村地区を中心に県下最大の夏秋きゅうりの産地となっています。

⁸ 明間、下川、皆田、伊南坊、新城、明石、伊賀上、松葉、鬼ヶ窪、上松葉、下松葉、久枝、神領、野田、小野田、永長、山田、鞍貫(以上、現西予市)、鎌之倉、若山、谷、影之平、布喜之川、中津川、国木牛名、田浪、古藪、河舞、大峠、五反田、八代、南茅、北茅、松尾、下郷、上郷、河之内(以上、現八幡浜市)の各村。

⁹ 明間、下川、皆田、伊賀上、鬼ヶ窪、久枝、神領、野田、小野田、永長、山田、津布理(現西予市三瓶町)、郷内、上岩木、下岩木、小原の各村と松葉町。

¹⁰ 伊延、岡山、河内、東多田、大江、加茂、田苗真土、空所、馬木、清沢、下松葉、上松葉、坂戸、田野中、伊崎、常定寺、新城、明石、伊南坊の各村。

¹¹ 柚山俊夫 2022「近世初期における三間地域の地位」『清良記と大森城跡—三間の中世世界を考える』第4回清良記シンポジウム資料(宇和島市教育委員会、鬼北の文化財活用戦略会議編集発行)

この他、宇和ではいちご、城川地区ではトマト栽培も盛んです。

果 樹

果実の総生産額は 379 千万円で農業産出額の 23.3%を占めます¹²。宇和海沿岸部では温州みかん、伊予柑、ポンカン等の柑橘類、宇和盆地ではぶどう、城川ではゆずや栗の栽培が盛んです。近世の宇和海沿岸部では、漁業の不漁を補うように斜面地での麦、甘藷、樫などの栽培が行われ、近代には養蚕の隆盛に伴う桑畑化で、段畑の石垣が整備されました。戦時中は再び麦や甘藷の栽培を余儀なくされ、昭和 30 年代から柑橘栽培へと転換しました。

現在は柑橘の多品種栽培が盛んで、明浜ではポンカン、三瓶ではニューサマーオレンジ（日向夏）が特徴的な作物です。南予の樹園地のほとんどが急傾斜地で、灌漑施設は皆無に近いので、用水の確保が強く望まれ、昭和 56 年に野村ダムが完成。野村ダムを主水源として南予の農業用水が確保されるとともに（南予用水事業）、上水道としても利用されるようになりました。

酪農、畜産

西予市の農業産出額の半分近くを畜産が占めています。野村では、昭和 19 年（1944）に千葉から乳牛 26 頭を導入したことに始まる酪農が盛んで、乳用牛の総頭数 2,240 頭は県内最多、産出額は県全体の半分を占めます。大野ヶ原では標高 1,000～1,400m の高原で酪農がおこなわれています。大野ヶ原は明治期には陸軍の演習場として、第二次大戦中は軍馬の放牧地として利用されていました。戦後は開拓が進められましたが、四国カルストの酸性土壌や北海道と同じと言われる寒冷な気候といった過酷な自然条件での営農は安定せず、僻地での暮らしに耐え兼ねて下山する者が続出しました。昭和 30 年代には馬鈴薯と大根栽培で営農は安定化の兆しをみせ、昭和 35 年（1960）ころから酪農へと転換。現在は、県下最大の酪農地となっています。西予市の肉用牛の総頭数 5,230 頭も県内最多で、県全体の半数以上を占めます。なお、市域の畑地のうち 10,872a（27.5%）が牧草専用地となっています。また、三瓶では養豚が盛んで、総頭数 53,700 頭も県内最多で（愛媛県「令和 4 年家畜に関する統計」）、西予市の農業産出額の 4 分の 1 以上を占めています¹³。

養 蚕

安政 3 年（1856）に上州高崎の上田庫之助が卯之町で養蚕技術や蚕品種の改良を伝授したことに始まるとされ、慶応 2 年（1866）から宇和島藩が養蚕を奨励しました。野村では明治 4 年（1871）ころから養蚕が始められました。宇和では、明治 14 年（1881）卯之町の清水清十郎が養蚕伝習所を設置し、養蚕と製糸法を伝習させています。明治 23 年（1890）卯之町製糸場が設立。明治 34 年（1901）の『愛媛県統計書』によると、東宇和郡の養蚕戸数は 4,517 戸（県全体の 17.9%）、生産高は 3,447 石（同 13.2%）に及びます。同 37 年（1904）、東宇和郡共同養蚕組合が結成され、同 41 年（1908）には東宇和郡立宇和農蚕学校（現在の宇和高校の前身）が設立され、養蚕技術者、指導者の養成を目的とした教育が行

¹² 農水省 HP より（令和 2 年）。

¹³ 脚注 10 に同じ。

われました。大正6年(1917)東宇和郡内の機械製糸工場は12、座繰製糸工場は37となり、生糸生産高は16,227貫となりました。愛媛県は、明治末から昭和10年代頃まで、西日本有数の生産量を誇りました。東宇和郡(明浜、宇和、野村、城川)では地域を問わず養蚕が盛んに行われ、農家の大きな収入源となり、個人では住宅兼蚕室や養蚕専用施設等、地域では共同蚕種飼育場などの整備が進みました。しかし、昭和5年(1930)の繭価の暴落により、野村では製糸工場6工場が倒産するなど大きな打撃を被りました。

カメラア(白椿)の商標で取引された野村の生糸は、皇室やエリザベス女王の戴冠式、伊勢神宮式年遷宮等の御料糸として納められました。平成28年(2016)2月2日、「伊予生糸」の名称で農水省の地理的表示保護制度(GI制度)の産品として登録されました。

以上のような現在の宇和海沿岸部、宇和盆地、野村・城川地区の農業の違いは、耕地の大半を樹園地が占める明浜、三瓶、9割を田が占める宇和、畑が4割を超える野村、田が6割、樹園地が4分の1を占める城川といったように、経営耕地面積の違いにも顕著に現れています。

④ 林業

近代には松が坑木として利用され、北九州へ向けて搬出されました。明治44年(1911)、東・西・北宇和郡と喜多郡で県全体の93.5%を生産し、東宇和郡では県全体の37.7%、金額にして21.4%を産出しました。

肱川流域では、明治以降用材生産が多く、水量豊富で河床勾配の緩やかな肱川では川船や筏流しが盛んに行われました。戦前、肱川と舟戸川が合流する野村町坂石には、筏師の集団が三つあり、木材はここで筏に組まれて3日の行程で長浜へ送られました。

また木炭は明治期以降、山間部を中心に生産されました。惣川村では大正中期頃から養蚕が盛んになるにつれ黒炭の需要が伸び、大正15年(1926)には年産60,000俵を生産しています。木炭は川舟で搬送されました。肱川流域は北・南宇和郡と並び県内の二大産地であり、クヌギ切炭の産地として全国に知られる存在でした。戦後は木材需要が高まり、焼畑が植林へと転換していきました。

西予市における令和2年度(2020)の林業就業者数は101人です(県内第3位)¹⁴。西予市の林野面積は39,736haで、市の総面積の77.3%を占めます(県全体の9.9%)。

⑤ 漁業

寛文7年(1667)の『西海巡見志』によると、明浜、三瓶に19の浦、202艘の網船のほか鰯網があると記されており、近世の宇和海沿岸で鰯網漁が盛んに行われた様子が見えます。鰯を干して作った干鰯^{ほしか}が金肥として綿栽培の盛んであった上方へ出荷され、藩の重要な財源となったこともあり、宇和島・吉田両藩とも漁業の保護・統制を図りました。明治

¹⁴ 愛媛県ホームページより。

8年(1875)の史料では、狩浜浦(明浜)ではほぼ全戸が網子として漁業に従事していたことがわかっており、多くの浦でも同様の状況であったと思われます。

明治に入り、従来の鰯網漁は不漁になったことから、^{しま}縞と呼ばれる木綿織の行商を九州などで行うものが増加したほか、三瓶では沖合・遠洋漁業に転換するものもあらわれました。戦後、昼は段々畑での農業、夜は沿岸での漁業を営む者も多かったのですが、昭和30年代からは真珠・魚類養殖やシラス漁へと転換していきました。

現在の宇和海の海面漁業は鰯、鯷、鯖などを対象にするまき網漁業が主体で、海面養殖では魚類養殖、真珠養殖が盛んです。西予市の漁業経営体数は139(明浜41、三瓶98、9.1%)¹⁵で、その内訳は小型底びき網16(18.6%)、船びき網11(37.9%)、大・中型まき網1(33.3%)、中・小型まき網2(4.5%)、その他の刺網8(6.8%)、その他の網漁業4(8.3%)、その他のはえ縄16(33.3%)、その他の釣66(14.9%)、採貝・採藻18(12.9%)、その他の漁業16(13.4%)、ぶり類養殖3(2.3%)、まだい養殖9(4.6%)、ひらめ養殖5(35.7%)、とらふぐ養殖1(16.7%)、その他の魚類養殖8(7.7%)、わかめ類養殖1(9.1%)、真珠養殖13(1.8%)です。

⑥ 製造業

木綿織、紡績など

明治期に八幡浜で綿織物業が盛んになると、二木生などでも木綿織(縞)業者が増加し、九州方面に行商に出てこれを販売しました。明治37、38年(1904、05)には^{はぶ}垣生の全戸数の7割が機屋を営み、明治末には垣生縞、朝立縞の名で知られ年産20万反に及びました。狩浜でも、女性の多くが狩浜縞(狩江縞)を織り、男性が九州などで行商し、得られた現金は住宅整備、寺社整備、段畑整備などに投資されました。三瓶では染色業も盛んで、当初阿波藍を移入していましたが、地藍を栽培し使用するようになりました。

大正3年(1914)^{にぎゅう}二及に織布工場が創業し、大正8年(1919)には朝立で三瓶織布株式会社が設立。明治29年(1896)に誕生した八幡浜紡績は近江帆布と名を変え、昭和4年(1929)三瓶に移転しました。狩浜や渡江にも動力利用の織物工場ができ、養蚕が盛んになったこともあり、個人での手織りは減少しました。昭和8年(1933)近江帆布は朝日紡績となり、従業員1,430名を誇りました。戦時下、敷島紡績に併合され、戦後昭和35年工場閉鎖。その後、大阪堺の喜福工業の出資を受け伊予紡績として操業し、昭和52年からは喜福工業株式会社伊予工場として操業しました。

楮・三桎、和紙(泉貨紙)

近世初期に野村の兵頭太郎右衛門(泉貨居士)が開発したとされる泉貨紙は、重ね漉きで厚く強靱な特徴があり、宇和島・吉田両藩の重要な財源の一つでした。広見・松ノ森(川原

¹⁵ 以下、各種別の割合は、愛媛県太平洋南区(八幡浜市(太平洋南区)、西予市、宇和島市、愛南町)における西予市の経営体の占める割合(2018漁業センサスより)。

第1章 西予市の概要

淵)、魚成(城川)、白髭(野村)では、万治3年(1658)、小物成¹⁶のうち楮¹⁷をほぼ現物で納めており、すでに楮と紙がこれらの地域の特産であったと思われます。宇和島藩5代藩主村侯(藩主在位1735~1794)の藩政改革では、殖産興業の中心に木蠟と紙が据えられました。安政4年(1854)の野村組¹⁸の泉貨紙手漉き業者は864人、山奥組¹⁹は524人、川原淵組²⁰は307人でした。明治期には楮、明治後半以降には三極が焼畑で栽培され、大洲・内子・五十崎などへ搬出され、泉貨紙とともに貴重な収入源となりました。

現在、泉貨紙(記録作成等の措置を講ずべき無形の文化財)を製造するのは野村町の菊地製紙のみで、菊地孝氏は父定重氏とともに現代の名工にも選出されています。

■ (4) 観 光

西予市への総観光客数は、平成20年度(2008)以降200万人超で推移しています。近年、市内の公共施設で入込客数が多いのは、どんぶり館(494,408人)、きなはい屋(173,800人)、愛媛県歴史文化博物館(148,491人)、潮彩館(134,434人)、クアテルメ宝泉坊(107,251人)、遊の里温泉(90,742人)などで、県の博物館の他は道の駅や温泉施設の人気の高さがうかがえます(令和元年度、西予市経済振興課提供資料より)。

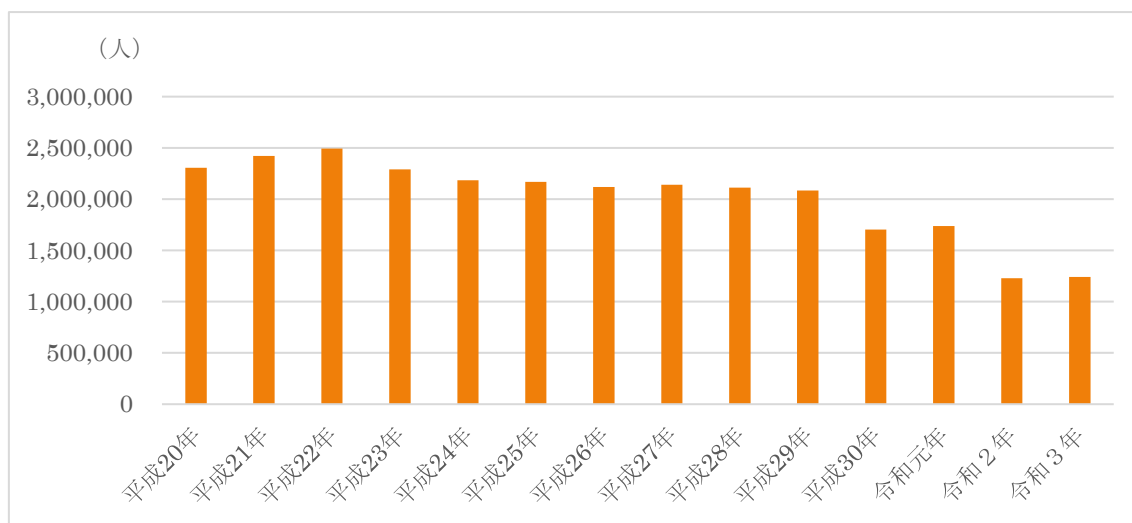


図14 総入込客数(西予市経済振興課提供)

■ (5) 交 通

¹⁶ 田畑以外に賦課された租税。

¹⁷ 楮、三極栽培は本来農業に分類されるものですが(総務省「日本標準産業分類」、ここでは関係の深い和紙生産と同じ項目に含めます)。

¹⁸ 栗木、西、鎌田、蔵良、中通川、釜川、前石、阿下、野村、片川、次ヶ川、平野、高瀬、伊与地川、蔵、白髭、戸鹿野、林乗、広田、長谷、四郎谷、河西の各村。

¹⁹ 魚成、長谷、今田、田野々、男河内、下相、土居、古市、伏越、中津川、川津南、窪野、嘉喜尾、遊子谷、野井川、惣川、横林、坂石の各村。

²⁰ 現在の北宇和郡鬼北町、松野町域。

第1章 西予市の概要

鉄道ではJR予讃線が宇和盆地を南北に貫き、特急停車駅である卯之町駅が主要な駅となっているほか、伊予石城駅、上宇和駅、下宇和駅があります。卯之町駅の令和元年度(2019)の利用状況は、年間178,120人で1日平均の乗降者数は488人です。

バスは宇和島自動車株式会社が市内外を結ぶ17路線を運航。また野村ツーリスト有限会社による廃止代替バス、市が運行する生活交通バス、デマンド乗り合いタクシーがあります。このほか、市内にタクシー事業所が8社あります(『西予市地域公共交通計画』より)。

高速道路は、四国横断自動車道松山自動車道西予宇和インターチェンジが当市の玄関口となっており、国道56号で大洲市、宇和島市と繋がります。宇和からは国道56号、県道等を経由して、明浜、野村、城川、三瓶、八幡浜市、宇和島市三間町、宇和島市吉田町、鬼北町と結ばれています。さらに明浜からは三瓶、宇和島市吉田町と、野村からは大洲市、久万高原町、高知県梺原町と、城川からは梺原町、鬼北町と、三瓶からは八幡浜市と県道等を介して結ばれています。

松山市までの所要時間はJR予讃線特急で約60分、自動車では高速道路利用で約75分です。また近隣の大洲市、八幡浜市、宇和島市までの所要時間は自動車で約25~30分です。

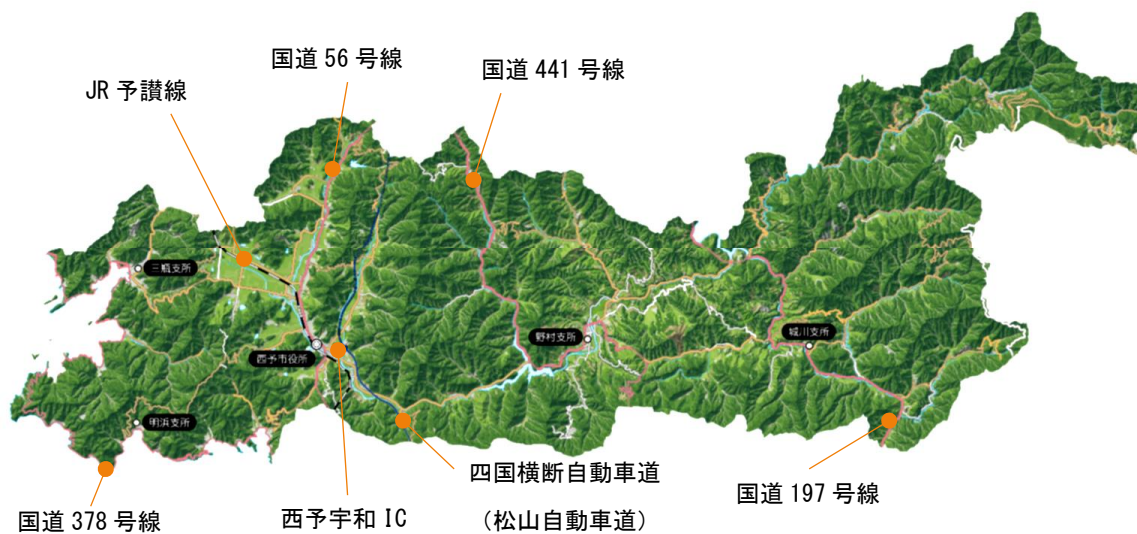


図15 主な交通網(『四国西予ジオパーク公式ガイドブック』より引用・加筆)

■ (6) 歴史文化施設

西予市に所在する歴史文化施設は、下表のとおりです。旧宇和町の卯之町地区に多く、合併前の旧町からの施設が各支所周辺などに位置しています。

表7 主な歴史文化施設

施設名	備考
明浜歴史民俗資料館	明浜の民俗資料、古文書類のほか市指定文化財を収蔵、展示。

第1章 西予市の概要

	直営（まなび推進課）。
俵津文楽会館	俵津文楽の練習、定期公演で利用の他、県指定有形民俗文化財の人形頭・衣裳道具類も保管。直営（明浜支所地域生活課）。
開明学校、申義堂、宇和歴史民俗資料館	重要文化財・旧開明学校校舎や市指定・申義堂を公開。明治の授業体験も実施。資料館で宇和の考古資料を展示。指定管理。
宇和民具館	宇和盆地の民俗資料を収蔵、展示。指定管理。
先哲記念館	美術品や宇和ゆかりの先人の資料を収蔵、展示。指定管理。
末光家住宅	重要伝統的建造物群保存地区（以下、重伝建地区）内の商家建築。毎月1回公開。指定管理。
旧武蔵	重伝建地区内にあり、かまど炊き体験ができる。指定管理。
考古センター	出土資料の整理、保管を行う。直営（まなび推進課）。
西予市図書交流館（中央館）	通称まなびあん。直営（まなび推進課）。
宇和文化会館	コンサートなどの自主事業等の他、各種イベントや文化活動の場等として利用。指定管理。
愛媛県歴史文化博物館	愛媛の歴史文化に関する展示、収蔵、調査研究、普及事業を実施。学芸部門は県所管、施設の管理運営や普及は指定管理。
シルク博物館	野村の近代化を支えた蚕糸業に関わる資料等を収蔵、展示。機織り、染色などの体験も可。直営（野村支所産業建設課）
野村茅葺き民家交流館・土居家	野村町惣川の庄屋土居家の住宅（本宅は市指定）を利用した宿泊施設。指定管理。
西予市図書交流館（野村分館）	通称ゆめちゃんこ。直営（まなび推進課）。
乙亥会館	平成30年豪雨の記録・記憶を継承する災害伝承展示室、相撲に関する展示が併設されている。直営（まちづくり推進課）。
城川文書館	旧城川町内を中心に旧庄屋文書や近代村役場の文書を収集保管。直営（まなび推進課）。
城川歴史民俗資料館、郷土文化保存伝習施設	民家を移築展示するほか、城川町内の考古資料、民俗資料を収蔵、展示。直営（経済振興課）。
ギャラリーしろかわ	全国かまぼこ板の絵展覧会のほか所蔵作品の展示などを実施。直営（経済振興課）。
ジオミュージアム	四国西予ジオパークの拠点施設で、西予市の地形、地質、生態系などに関する展示を行う。直営（ジオパーク推進室）。
三瓶文化会館	各種イベントや文化活動の場等として利用。三瓶の民俗資料などを展示するふるさと展示室、図書交流館（三瓶分館）も併設。直営（三瓶支所地域生活課）。
朝立会館	朝立文楽の練習、公演での利用のほか、県指定有形民俗文化

	財の人形頭・衣裳道具類を保管。文化活動の場等としても利用。直営（三瓶支所地域生活課）。
--	---

*西予市図書交流館の城川町内の分館は、遊子川・土居・高川・魚成の各地域づくり活動センターに併設。

3. 西予市の歴史的背景

■ (1) 先史・古代

市域における最古の人類の足跡は、縄文草創期までさかのぼります。四国の縄文遺跡の洞穴・岩陰遺跡の約4割が西予市に集中するといわれ、縄文草創期の土器や前期の貝製装飾品などが出土した穴神洞遺跡や、石器製作址である中津川洞穴遺跡などが知られています。山間部では洞窟や岩陰を利用し、狩猟・採集生活を営んだ様子がうかがえます。一方、宇和海沿岸部では、明浜歴史民俗資料館所蔵の鹿角製釣針²¹、石斧、三瓶出土の黒曜石製石鏃などから、海山の幸を利用した生活や九州との交流があったと考えられます。

永長上横田遺跡^{ながおき}の調査から、弥生時代前期前半に宇和盆地に稲作が伝播したことは明らかです。同遺跡からは、弥生時代前期の全期間にわたる包含層が確認されており、稲作伝播後も安定して生活が営まれ、稲作が定着していったものと思われます。弥生時代中期には、縄文時代の系譜を引く在地色の強い西南四国型土器文化が四国西南部に広がります。宇和盆地では、西南四国の在地性を保持しながらも、九州や瀬戸内との交流も行っていました。弥生時代後期になると、土器の形態変化や高坏や器台といった新たな器種の出現などから、中予地方の影響が強まることが指摘されています。また宇和盆地からは青銅器が多く発見されていますが²²、九州産の銅矛のみならず瀬戸内の平形銅剣も受容しています。このように、宇和盆地は弥生時代の比較的早い段階から稲作を受容し、継起的に遺跡が営まれ、九州や瀬戸内、土佐との交流によって文物を入手し、南予の中核的な存在としての役割を果たしたものと考えられます。

こうした背景のもと、宇和盆地には笠置峠古墳をはじめとする前期前方後円墳が3基築造されました。笠置峠古墳では西部瀬戸内地域と共通する飲食を伴う葬送儀礼が執行され、その道具である土器や食物型土製品においては関西との共通性も指摘されています。中期古墳としては、岩木赤坂古墳や長尾古墳などがあり、赤坂は鉄製甲冑を、長尾は朝鮮半島との関係が指摘される有肩鉄斧を出土しています。また河内谷遺跡、伊勢山大塚古墳からは5世紀後半代と6世紀後半代の陶質土器が出土しており、朝鮮半島との緊密な関係を物語ります。安養寺裏山古墳出土の鏡は西晋以降の中国製方格T字鏡で、国内では5世紀以降の古墳から出土していることが指摘されています。6世紀以降は、河内奥ナルタキ古墳群、粟

²¹ 採集場所は宇和島市日振島。

²² このほか野村町の四郎谷から中細形銅矛が採集されています。

尻古墳群、妙法寺裏山古墳、松ノ本古墳、^{かたぎ}榎木駄場古墳などの後期古墳が営まれます。大江垣内古墳からは7世紀前葉頃と考えられる^{そうりゅうかんとうつがしら}双龍環頭柄頭が出土しています。

標高340mの丘陵中腹緩斜面に位置する東大谷古墳は、7世紀代の方墳と考えられています。奈良県橿原市藤原宮跡出土木簡「宇和評小物代贄」や奈良県明日香村石上遺跡出土木簡「(宇)和評仕俵 □□五野石」などから、7世紀後半には宇和評が設置されていたことがうかがえます。『和名類聚抄』²³は宇和郡四郷(石野、^{にい}石城、三間、立間)の、また奈良市平城京出土木簡は^{あまべ}海部郷の存在を示します。明石古墳出土とされる^{わらびてとう}蕨手刀は7世紀後葉から8世紀前葉に属すると考えられ、明石方面へ新興勢力が進出した可能性が指摘されています。8世紀前後の瓦を出土した西ノ前遺跡では、瓦基壇と考えられる遺構が見つかっており、近接遺跡からは脚部多角柱高坏や陶硯が出土しています。坪栗遺跡では石帯のほか、青銅器生産に伴う^{ふいごほぐち}鞆羽口や^{るつぼ}埴塙が、近接する国木遺跡からは掘立柱建物、墨書土器、転用硯などが出土しました。坪栗遺跡、国木遺跡は^{かんが}官衙に関連する遺跡だと考えられます。また、宇和盆地には条里地割が敷かれたことも指摘されています。

以上のように、古墳時代においては複数の前期前方後円墳に加え、各時期の主要な古墳が営まれるとともに朝鮮半島との関係が、古代においては中央や律令国家との関連がうかがえ、宇和盆地が引き続き南予の中核的な存在であったことがわかります。

■ (2) 中世

建仁3年(1203)に伊予国の知行国主となった西園寺公経^{きんつね}は、嘉禎2年(1236)橘氏の保有する宇和郡地頭職を停止させ、のち伊予国最大の荘園とされる宇和荘を入手し、自らの経済基盤の一つとしていきます。西園寺氏の分流が宇和盆地へ下向した時期は判然としませんが、南北朝期(1336~92)であった可能性が指摘されています。西園寺氏は在地領主として松葉城(のち黒瀬城)を拠点に宇和郡に影響を及ぼすようになりますが、広範かつ独立性の高い地形を有する宇和郡の支配は十分に行き届かなかったものと思われます。

戦国期、宇和郡は、喜多郡宇都宮氏、土佐一条氏・長宗我部氏、豊後大友氏などからたびたび侵攻され、騒乱が絶えませんでした。永禄11年(1568)の鳥坂合戦は、河野・毛利勢と宇都宮・一条勢が激突した南予最大の合戦と言われます。天正11年(1583)長宗我部氏の伊予侵攻を受け、三滝城(紀親安)をはじめ、^{おうぼん}黄幡城(紀綱安)、甲ヶ森城(永山豊綱)、白岩城(白岩祐宗)、鑑ヶ鼻城(相津国光)、猿ヶ滝城(岩本乗氏)、白石城(大塚広義)、龍ヶ森城(魚成通親)、白木ヶ城(宇都宮定綱)、鎌田ヶ城(宇都宮直綱)、上城(上甲貞義)などが攻め落とされました。翌天正12年(1584)、長宗我部氏と講和した西園寺公広は城を降り、豊臣政権による四国平定後の天正15年(1587)に滅ぼされました。

中世には、村々の災いを払い安穏を祈るため、しばしば大般若経の書写事業が行われており、宇和郡でも長善寺(城川町魚成)、神久寺(宇和町神領)、安養寺(宇和町岩木)などで

²³ 承平年間(931~938)に編纂された辞書。

の事例があります。こうした南予の大般若経書写については、南予の地が干害や疫病などの災害に見舞われることが多かったからとの背景があったと捉えられています。また、天台僧にとっては、南予の地が円頓戒達成の聖地として考えられていたとの指摘があります。

13世紀前半～半ばに位置付けられ県内最古級の五輪塔である明石寺五輪塔^{めいせきじ}は、流紋岩質凝灰岩（いわゆる伊予の白石）製で中予地域との関連がうかがえます。明石寺の中世五輪塔には、他に礫質凝灰岩（天霧石）、阿蘇溶結凝灰岩、砂岩、花崗岩などの石材が見られ、讃岐、東九州、瀬戸内等との交流がうかがえます。宇和海沿岸部に分布する五輪塔などの石造物には、阿蘇溶結凝灰岩製や花崗岩製のものが多く、やはり東九州や瀬戸内との交流があったことがうかがえます。

■ (3) 近世

秀吉の四国平定後、小早川隆景、天正15年（1587）に戸田勝隆、文禄4年（1595）に藤堂高虎、慶長13年（1608）に富田信高が宇和郡を治めました。慶長19年（1614）伊達政宗の長子秀宗が板島10万石に封ぜられ、翌元和元年（1615）に秀宗が板島丸串城に入ります。明暦3年（1657）には秀宗の五男宗純が3万石を分知され、吉田藩が成立しました。

宇和海沿岸部では、すでに中世には行われていたと思われる鰯網漁が盛んで、上方へ出荷された干鰯^{ほしか}（魚肥）が藩財政の収入源の一つとなり、藩は漁業の保護・統制を図りました。農業では、水が得られる谷筋では稲作が行われましたが、傾斜地では麦作や甘藷栽培が中心でした。高山浦では、豊富な石灰岩を用いた石灰焼きが江戸時代後期から始まり、慶応ころには土佐や上方へ積み出されるようになりました。三瓶の二木生は、八幡浜や雨井²⁴とともに江戸後期以降海運業が盛んでした。安政4年（1857）の朝立浦には近隣の港のほか安芸、大洲等の船も出入りし、松や薪、サバなどが積みだされました。宇和盆地は引き続き宇和島藩最大の稲作地帯で、近世にため池が多数造成され耕地の拡大が進められました。宇和盆地で生産された米は峠を越えて俵津や津布理^{つぶり}へ運ばれました。野村組、山奥組、河原淵組を中心に製造された泉貨紙は藩の重要産品とされ、楮役所や紙方役所の設置、専売制の実施など藩の統制・介入がありました。このほか櫨^{はぜ}の栽培も奨励され、こちらも藩の重要産品となりました。

西園寺氏の居城、黒瀬城山麓に形成されていたという松葉町（のちの卯之町）は、大念寺山麓に移されたこととされ、宇和島藩と大洲藩を結ぶ街道沿いにあり交通の要衝であったことから、在郷町²⁵、宿場町としてまた四国八十八箇所霊場明石寺の門前町として発展しました。野村組の中心となった野村も街道沿いに発展した在郷町で、藩政期には紙役所が置かれました。土居は甲ヶ森城の山麓にあり、土佐禰原との国境にある街道沿いの在郷町として知られます。

山林は生活に欠かせない場所で、山がちな宇和島藩・吉田藩では、明和6年（1769）以

²⁴ 現在の八幡浜市保内町。

²⁵ 農村に形成された町場。

降の蔵貫村と山田村、文化5年(1808)の皆江浦と下泊浦、文化6年(1809)の東山田村、野田村、伊賀上村と俵津浦などしばしば境界争論が発生し、藩が裁許に乗り出しました。

また、風水害や飢饉、地震などは低生産性と零細性が指摘される当地域にとって大きな打撃となりました。加えて財政に苦しむ藩による諸産品への統制や介入もあり、百姓たちのくらしは厳しいものとなり、徒党²⁶、逃散²⁷、強訴²⁸といった形で抵抗する百姓一揆が多く発生しました。

■ (4) 近代・現代

明治4年(1871)7月の廃藩置県により伊予八藩はそのまま県となり、11月には南予各県が合併して宇和島県となりました。明治5年(1872)宇和島県は神山県となり、翌明治6年(1873)石鉄県、神山県が合併し、愛媛県が誕生しました。明治21年(1888)、市制・町村制が公布され、旧町・旧村が設置されています。大正10年(1921)には旧三瓶町、翌年には旧野村町が設置されました。

藩政期に在郷町として栄えた卯之町は藩政期以来の商業を引き継ぎつつ、後に中心的産業となる養蚕業の萌芽、金融業の隆盛が見られたほか、郵便局、警察署(邏卒屯所^{らそつとんしよ})、町役場、郡役所、宇和島区裁判所卯之町出張所、愛媛県収税部卯之町出張所など東宇和郡の行政機関が集まる中心地として栄えました。野村は泉貨紙、製糸、畜産などの地場産業関連で栄え、土居は須上、赤松などの雑貨商が横林、惣川、遊子川、魚成、土居、高川、日吉、土佐禰原などから、木材、楮、三桮、櫨、繭などを集荷し、宇和島、八幡浜、吉田などから仕入れた食料品(米・醤油・砂糖・塩・干魚)や衣服、日用雑貨を販売するなど、商業集落として繁栄しました。坂石は、山間部の木材、楮、三桮、繭などを大洲、内子方面へ肱川の水運で運び出す河港として栄えました。

近代は戦争の時代でもありました。国内では明治10年(1877)に西南戦争が起こり、高山の石灰船が九州から敗残兵を連れ帰ったという逸話が残ります。明治27、28年(1894、95)の日清戦争、明治37、38年(1904、05)の日露戦争の勝利は多くの犠牲の上にあります。太平洋戦争では、国内外で多くの命が失われました。当地への大規模な空襲はなかったとはいえ、焼夷弾の投下や機銃掃射が実際に行われました。市域には多くの防空壕や複数の防空監視廠が設けられ、宇和盆地には終戦間際に陸軍の特攻用の飛行場が建設されました。城川文書館が所蔵する戦時中の公文書からは、銃後の人々の苦しいくらしの様子が浮き彫りになります。

昭和29年(1954)宇和町と黒瀬川村、翌昭和30年(1955)三瓶町、野村町、昭和33年(1958)に明浜町が設置されました。平成16年(2004)4月1日、東宇和郡明浜町、宇和町、野村町、城川町と西宇和郡三瓶町の5町が合併して、西予市が誕生しました。

²⁶ 百姓たちがある目的のために集まること。

²⁷ 申し合わせて村を出て他の村や他領へ逃げ去ること。

²⁸ 徒党を組んで要求を訴えること。